

資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2008-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008121



所有と分配の人類学
－ エチオピア農村社会の土地と富を
めぐる力学
松村圭一郎 著

本書は、2005年度に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出された博士学位論文に、大幅な加筆・修正を加えたものである。著者が1998年よりフィールド調査を行ってきたエチオピア西南部・コンバ村が、本書の舞台である。

本書は三部構成をとっており、進むにしたがってミクロからマクロなレベルへと視野が広がっていく形になっている。

第Ⅰ部「富をめぐる攻防」では、人々の関係性が、「贈与」を中心とした富の分配にどのように影響しているのかに着目している。ここでは、豊かな者への「妬み」や豊かな者がもつ「おそれ」が、富の分配に大きな役割を果たしていることを明らかにしている。

第Ⅱ部「行為としての所有」では、土地には利用方法によって多様な「所有」形態が存在することを示し、分益小作やコーヒー農園での雇用など土地に関する社会関係を整理したのち、土地の「所有」や利用に関する争いがどのように解決されていくのかを検討している。その交渉過程には、「規則性」が存在している一方で、行政、年長者、宗教・呪術といった多元的な権威の枠組みの存在が、「不規則性」をもたらすことを指摘している。

第Ⅲ部「歴史が生み出す場の力」では、19世紀前後に形成されたゴンマ王国から始まり、19世紀末からのアムハラによる支配、1974年からの社会主義政権期を経て、現在のエチオピア人民革命民主政権期に至るまでの、特に土地に関する政策の変遷とその影響が分析されている。

長期にわたる現地調査による多数の詳細な事例を積み上げることで、本書はエチオピアの農村部における多様で動態的な「所有」のあり方を明らかにしている。西洋起源の私的所有概念に対して、文化人類学的見地から「所有」を相対化する一方で、文化人類学において対象社会を市場経済とはまったく異質なものとして扱う傾向に対しても一石を投じている。

(児玉由佳)

京都 世界思想社 2008年 324p.



朝倉世界地理講座 12
－ 大地と人間の物語
アフリカⅡ
池谷和信・武内進一・佐藤廉也 編

2007年刊行の朝倉世界地理講座シリーズ『アフリカⅠ』の続編。『Ⅰ』では、アフリカ大陸全体を展望する総説、「イスラームアフリカ(北アフリカ・西アフリカ内陸部)」と「エチオピア」の第Ⅰ～Ⅲ部が収録されていたが、本書『アフリカⅡ』で残るアフリカ大陸の各地域と島々が網羅される。

『Ⅰ』と同様に、本書でもまず大まかな地域分けが施され、それら地域ごとに「風土と環境」「人々と暮らし」「国家と社会」の3つのグループ分けのもとに関連論文が配置される。編者前書きにもあるとおり、執筆者(総勢29名にのぼる)の専門は地理学の枠を大きく超え、自然人類学、文化人類学、経済学、政治学、歴史学、社会学など多岐にわたる。いずれも蓄積のある執筆陣の論文集として読み応えがあるのはもちろんだが、本書の場合、そのグループ分け方式が奏功し、800頁以上という大部でありながら全体として流れのある作品になっている点が興味深い。

第Ⅳ部「バントゥーアフリカ」は、東・中・南部アフリカにわたる地域の広がりや反映し、19論文で構成される。現存の国家の枠組みを超えた自然の変化や人の移動が各論者たちによってわかりやすく説明される一方で、カメルーン、ガボン、東アフリカ3カ国、ジンバブウェ、モザンビーク、ナミビア、南アなど各国の暮らしや国家のあり方が最新の動きを網羅しつつ考察される。続く「西アフリカ沿岸部」(第Ⅴ部)は8論文から成る。森林・サバンナの分布変動が考察されたのち、ベナン、ガーナ、コートジボワール、ナイジェリア、トーゴの暮らしや国家、紛争の問題に焦点が当てられる。「島嶼部」(第Ⅵ部)はマダガスカルとモーリシャスを取り上げた3論文から成る。

編者3名がそれぞれ「観光」「アフリカ支援」「フィールドワーク」をめぐる、アフリカと自身の関わり合いを振り返りつつ議論を展開した、巻末の「総括」も読み応えがある。アフリカの統計資料と、アフリカ関連の日本語書籍の総覧付き。やや高価だが、ぜひ手元に置いておきたい一冊である。

(津田みわ)

東京 朝倉書店 2008年 885p.





ポストコロニアル国家と言語
－ フランス語公用語国セネガルの言語と社会
砂野幸稔 著

著者は、アフリカ文学に関する研究と並行して、これまで20年余りにわたって丹念にセネガルにおける言語の問題に取り組んでこられたが、本書はその考察の集大成といえるものである。同国における「超民族語」(言語学者カルヴェの概念)であるウォロフ語の拡大過程に関する、綿密なフィールド調査を踏まえた分析と、セネガルにおける言語と政治(政策とナショナリズム思想)の歴史的な分析という、2本の太い柱となり、豊富な資料と補論を収める。

本書の狙いを、著者は、「アフリカ地域研究のなかに言語問題研究という領域を開くことだと述べる(p.11)」。ここで挙げられる「言語問題研究」とはいかなるものか。著者は、小川了氏の『可能性としての国家誌』(1998年)を重要文献として特筆したうえで、自著の試みが「小川が描き出したセネガル国家を、言語問題という観点から再照射する」ものだと言っている(p.33)。ここに明確にうかがえるように、著者の構想する言語問題研究とは、日々の日常実践と国家のありようのアクチュアリティをつかみ出す、「方法としての言語問題」という性格を有するアプローチだとわかる。狭義の文学研究やその範疇内での言語の知識といった限定的な範囲を超えて、言語の問題に無頓着であった従来のアフリカ研究に対して反省を促しつつ、広く響き合おうとする呼びかけが、ここには込められている。

評者にとってもっとも印象的だったのは、書記された現代ウォロフ語文学への関心から出発しながらも、言語が現に話される社会的実践のありようへと導かれていった、著者の探究の道のりである。この立場を取ることで、著者は、「何語で書くか」をめぐる、現代アフリカ文学の作家たちの主義主張を冷徹に捉え返しつつ、「言語問題のカタログ的分類」や「一般図式」の提供に傾きがちな社会言語学にも批判的に対峙するという、貴重な立ち位置を獲得することに成功したように思える。

(佐藤 章)

東京 三元社 2007年 412p.+xciiip.



アフリカの王を生み出す人々
－ ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権制社会
松本尚之 著

本書はナイジェリア人作家、チヌア・アチェベの引用からはじまる。いまや舌鋒鋭く国家や社会の問題を切る社会批評家としても活躍する作家の批判的エッセイから序章のキーワードが導かれている。「成り上りの王位(mushroom kingship)」とは、イボ人社会に雨後の筍といった様相で増殖した権威者「エゼ(eze)」や「首長(chief)」を皮肉った表現ながら、今日のイボ人をめぐる状況を表す用語としては(著者の訳語を含めて)秀逸であり、示唆的でもある。

イボ人社会におけるエゼの地位が、前世紀の国家権力により制度化され、委任首長とも呼びならわされてきたイギリスの植民地制度に由来するものであることは著者自身も認めるとおりである。植民地政策や国家政策による首長位の創造ないし復活、その創られた伝統としての経緯ゆえに、研究者をはじめとしてエゼや首長を否定的に捉える立場も根強い。植民地支配の遺産という側面を強調するあまり、これらの地位に対するイボの人々の関心の高さを、首長位をめぐるイボ人社会のダイナミックな動きは見落とされがちであった。著者が注目したのはそうした一面、すなわち首長位を望み、それを欲している人々の姿であり、それは本書のタイトルにも暗示されている。

人類学者である著者が描く民族誌として、長期のフィールドワークと複数回のフォローアップ調査の成果が本論部分で余すところなく披露されている。調査地とした地縁集団イトウでの見聞に足場を置きながら、イボ人社会をめぐる言説を検証し、そこでの首長制度をめぐる歴史的経緯を跡づけ、さらに今日におけるエゼの権威とその影響力をイトウの事例を中心に考察している。そこでは伝統的権威者という言葉だけでは表しえないエゼの姿が描き出されている。

エゼという新しい指導者の姿に象徴される現代のイボ人社会が、決してその「伝統的な共和主義」を放棄したわけではないこと。著者は冒頭引用したアチェベの批判への反論も忘れず、エゼを世界とイボ人を結ぶ「架け橋」と称して稿を結んでいる。(望月克哉)

東京 明石書店 2008年 324p.



あなたがいるから、わたしがいる
— アフリカの子どもたちを救ったある女性の記録
メリッサ・フェイ・グリーン 著
入江真佐子 訳

東京都の人口が1260万人。その全員が孤児で、しかも、全員がエイズで親を亡くしている。こういう状況を思い描いてみてほしい。アフリカでは、東京都の全人口にあたるほどのエイズ孤児(親をエイズで亡くした子どもたち)が存在する。もう少し詳細な数を挙げると、アフリカのHIV感染者が2450万人、アフリカのエイズ孤児が1200万人、そのうち、エチオピアのエイズ孤児が100万人(子ども全体の11%)である。これが現在のアフリカ、そして、本書の舞台となるエチオピアの現実の一面だ。

アフリカのエイズ災禍とエイズ孤児たち、そして、その孤児たちを引き取って育てている女性ハレグウォイン・タファッラの半生を綴った本書は、ジャーナリストであるメリッサ・フェイ・グリーンらのノンフィクションである。アメリカの多くの雑誌や新聞で2006年の「ベスト・ブック・オブ・ザ・イヤー」に選ばれた本でもある。

ハレグウォインは、首都アディスアベバに住む中流階級の女性で、40代半ばに事故で夫を亡くし、次いで娘を癌で亡くした。失意に沈む彼女の下に、ある日、教会の司祭がエイズ孤児の女の子を連れてくる。その子の世話をするうちに、喪失感を癒されていくハレグウォイン。だが、徐々に多くの人々が彼女の下にエイズ孤児たちを連れてくるようになり、その数は数十人にまで膨らんでいく……。

本書の内容は、ハレグウォインの半生だけにとどまらない。合間合間に、国際養子縁組、エチオピアの歴史、先進国が約束する国際援助の現状、知的財産の保護の名の下に利益を追求する製薬会社の動向に関する詳細な叙述が挿入される。ハレグウォインのヒューマニスティックな行動に涙する一歩手前、絶妙なタイミングで差し挟まれる挿話のせいで、読み手は涙を消費して終わる代わりに、このエチオピア女性の半生を通して、現実のグローバルな網の目の上で展開するさまざまな事象を知り、考えざるを得なくなる。本書の構成はまさに巧妙かつ緻密である。(岸 真由美)

東京 ソフトバンククリエイティブ 2008年 605p.



チョコレートの真実
キャロル・オフ 著
北村陽子 訳

「私の国には学校へ向かいながらチョコレートをかじる子供がいて、ここには学校にも行けず、生きるために働かなければならない子供がいる」。本書の序章には、カナダ人ジャーナリストである著者がコートジボワールのカカオ農園を訪れた際のエピソードとともに、こんな印象的な言葉が書かれている。

本書の執筆の動機となったのは、実際に著者がカカオ農園を訪れ、そこで働く子供たちと言葉を交わし、彼らが直面している状況を、「チョコレートをかじりながら学校にいく子供」たちに伝えなければならないと感じたからだという。とはいえ本書は児童労働の現場だけに焦点を絞って書かれた本ではない。もちろん、一部には児童労働の実態についても言及されているが、児童労働に関するチョコレート企業の動向やチョコレートが引き起こした政治問題等も紹介されており、幅広い視点から児童労働を捉えている。

本書の前半部分ではチョコレートの歴史が紹介される。3000年以上前の古代メソアメリカ文明から始まり、近世・近代のヨーロッパでのチョコレートの改良の話や近年のアメリカのチョコレート企業の経営戦略に至るまで網羅されている。122ページにわたる歴史を読み終える頃には、「アメリカのチョコレート産業はその後どんな展開を見せるのだろうか」と、歴史そのものに虜になってしまう程である。

歴史がすっかり頭に入った頃、本書の焦点はいよいよコートジボワールのチョコレートに移っていく。児童労働の体験談や政治問題、チョコレート企業の児童労働への対処方法、フェアトレード運動等、多岐にわたるテーマが取り上げられている。章ごとにくるとテーマが変わるため、気忙しい感じがするが、新たに多くの知識を得られるので、読後の満足感は大い。

本書は、児童労働に限らずチョコレートに関する情報が満載された一冊である。さまざまな視点から「チョコレートの真実」を学びたい方に、本書を手にとることをお勧めしたい。

(原島 梓)

東京 英治出版 2007年 381p.





貧困と経済発展
- アジアの経験とアフリカの現状

大塚啓二郎・櫻井武司 編著

本書は、家計データを利用してアジアで生じた貧困削減のプロセスを解明するとともに、サブサハラ・アフリカへの応用可能性を探ることを目的としている。家計所得の変化というミクロな視点から接近し、教育の役割に重点をおいていること、8カ国もの分析が行われていることに特色がある。家計調査に基づいた10本の論考と、それらを総括する終章からなっているが、論考のうち4本はアジアの貧困動態、3本がアフリカの貧困の現状、3本が両地域における教育と貧困の関係を扱っている。

本書の最大の特長は、長期の貧困削減の動態を家計データから分析している点にある。国レベルのデータでは分からない家計の貧困脱出・転落という変化や、そうした変化と家計の特徴との関連が明快に示されている。また、援助による一時的な変化でなく、経済成長にともなう長期的な変化の要因が分析されている点で、本書が提示する研究成果は、持続的な貧困削減のプロセスについて、一例を明らかにしている。

それらを要約すると、アジア諸国では「緑の革命」による農業所得の上昇が人的資本（教育）の蓄積に貢献し、それによって非農業セクターへの就業が増加した結果、農村の家計所得が飛躍的に向上した。他方、アフリカでも非農業所得が家計所得の増加（および変動の緩和）に寄与しているが、アジアのように持続的な増加をもたらすようなものではないと推測されている。つまり、アジアとアフリカでは、所得変化のメカニズムには共通点が見られるが、変化を引き起こす要因となる非農業セクターの発展や、農業技術の進歩に違いがあるため、貧困削減の結果に大きな差が生じているということであろう。

本書では統計処理が多用されているが、実務家や学生でも理解できるように配慮されている。「アジアの経験をアフリカに」という援助のコンセプトを検討する上で、本書は大きな助けになると思う。

（福西隆弘）



アフリカ開発援助の新課題
- アフリカ開発会議TICADⅣと北海道洞爺湖サミット

吉田栄一 編

アジア経済研究所では2007年9月から半年間、アフリカ開発会議（TICAD）研究会を開催した。本書は5回にわたり公開で開催した研究会の成果であり、参加した委員による各分野の問題分析と政策提言集である。

本書の章立ては以下の通りである。第1章「アフリカをめぐる国際援助の潮流についての一試論」（高橋基樹）、第2章「地球温暖化という開発課題と『人類の福祉』」（宮田春夫）、第3章「アフリカにおける平和構築と開発援助」（工藤正樹）、第4章「アフリカの貧困削減再考」（野上裕生）、第5章「アフリカ開発とキャパシティ・ディベロップメント」（松岡俊二）、第6章「アフリカにおける産業政策の新課題」（西浦昭雄・福西隆弘）、第7章「アフリカにおける地域開発の新課題」（吉田栄一）。

研究会では新たなアフリカ開発をめぐるテーマとして、気候変動と砂漠化防止、そして一村一品運動について取り上げた。またTICADの議題である貿易開発、産業政策、平和構築、貧困削減については、これまでの視点や政策、最近の状況を踏まえ、問題に取り組む新たな視点の可能性を検討した。そして各テーマのアフリカ各国での状況を踏まえつつ、開発政策上の課題、支援の方向性を展望し、政策論議に必要な視点を呈示することで、研究会としてTICADプロセスに貢献することを目的とした。

テーマは多岐にわたったが、共通に確認されたのはアフリカ側の中央から地方まで、あるいは政府内各部門にわたり、援助受容能力と政府の制度構築能力、問題解決能力をいかに高めるかという問題であった。そして、援助する側が援助国間競争、援助機関間競争に紛れて、実施能力を超えた援助額を拠出することの問題、方法論の確立していない援助を無理に拡大することへの危惧であった。会議は終了したが、アフリカ支援を5年で倍増するに当たってはぜひ関係者に一読していただきたい。

（吉田栄一）